



## 「1<99が正解とは限らない」

2021年11月



中高校長 森野 章二

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

(ルカによる福音書15章1節～7節)

上記の聖書箇所は、有名な99匹の羊と1匹の羊のたとえです。この箇所について、私はこれまで色々な人たちから、質問や意見を頂いてきました。

「99匹を野原に残して、見失った1匹を捜し回るなんて、不合理じゃないですか？ その間、99匹は放っておかれるのでしょうか？ 狼に襲われたりしたらどうするのですか？」

「かわいそうかもしれませんが、見失った1匹はあきらめて、99匹を大切に守る方が良いと思います。もしかしたらその1匹は、自分が不注意で迷い出てしまったのかもしれませんが。それなら自己責任です。真面目に羊飼いの後について行っていた99匹がかわいそうではありませんか？」

中には、興味深い解釈をされる先生方もいらっしゃいました。「99匹の羊たちは、たった1匹の仲間を捜しに出かける羊飼いの背中を見て育つのです。だから、教育論として、このたとえ話は正しいと言えます。」

いずれも、当然の疑問であり、もっともなご意見です。常識的な考えだろうと思います。しかし、一点だけ言えるとしたら、どの方も自分自身を羊飼いの立場や99匹の立場に置いて、あるいは傍観している第三者として考えておられる、ということです。

もし自分がこの1匹の羊であったとしたら。群れからはぐれ、羊飼いから離れて、自分がどこにいるのかも分からない。不安と心細さと恐れでいっぱい。喉はカラカラ、おなかはペコペコ。足は痛いしあたりはどんどん暗く、寒くなって行く。遠くから狼の遠吠えが聞こえてくる。泣きそうでもロボロボの自分。そんな自分を、99匹を野原に残してでも探しに来てくれた羊飼い。その姿を見た途端、きっと、その胸に飛び込んで、抱きついて、大泣きしながら感謝するのではないかと思います。

(次ページに続く)



聖書は、聖い神様の前では、私たち人間は一人残らず罪人である、と教えます。神様から離れて自分勝手な道を歩んでいる罪人。つまり、私たちは全員、この1匹の羊である、と語るのです。そんな失われた羊である私たちを救うために、イエスキリストが十字架にかかられた、というのが聖書の中心メッセージです。「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」など、最初からいないのです。

しかし、それなら何故、イエスはそのような存在しない「正しい人」のことに言及されたのでしょうか。その答は、イエスがこのたとえ話を始められたきっかけにあります。今回の聖書テキストの冒頭部分です。当時一般市民から嫌われていた徴税人や罪人たちをイエスは迎え入れて、食事まで一緒にしていました。そんなイエスをファリサイ派の人々や律法学者たちは批判しました。「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と。恐らく彼らは、自分たちはこんな連中とは違う、悔い改める必要のない正しい人だ、と考えていたのでしょう。あいつらは悪い奴。俺たちは正しい。しかし、そんな彼らは、「不平を言いました」と書かれています。自分だけが正しい、相手は間違っている、という立ち位置にいと、感謝の心が消えて、不平・不満が湧いてきます。自分のことを棚に上げて、他者への批判ばかりが出てきます。

一方、自己責任であろうと何であろうと関係なく、いなくなった1匹の羊を見つけ出すまで捜し回り、「見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』」と大喜びする羊飼い。何と対照的な姿でしょう。そのことに気付かせること、それが、イエスがこのたとえ話を話された理由の一つではないかと思えます。あなたたちが批判しようと、差別しようと、この人たちは神様の目には大切に尊い存在なのだ、と。彼らを受け入れず攻撃しているあなたたちもまた、罪人であり、救いの必要な1匹の羊なのだ、と。そして、あなたたちがそのことに気付いて助けを求めるなら、羊飼いはあなたたちをも救うために、野を越え山を越えて、見つけ出すまで捜しに来てくださるのだ、と。

昨今ネット上では、「炎上」という言葉が表すように、他人のことを批判し、非難する論調が目立ちます。それぞれの人は、正義感から意見を発しているのかもしれませんが。また、その意見の多くは、ある意味「正論」とも取れるものです。非難している内容は当たっているのかもしれませんが。しかし、他者を批判している自分もまた、失われた1匹の羊であり、神様の憐れみと許し、救いの必要な罪人であることを自覚する時、湧きあがってくるのは批判や非難ではなく羊飼いへの感謝であり、自分を探し回り、見つけ出してくださった方への賛美であるはずなのです。

他人を批判し、非難し、攻撃することに多くの時間とエネルギーが割かれる現代の風潮は、私たちの心を疲弊させ、何も良いものを産み出しません。神様の赦しと救いの恵みを伝える聖書のメッセージがいつの時代にも必要とされる所以です。